

半白系キュウリの収量特性

野口 貴・沼尻勝人・海保富士男・木下沙也佳  
(園芸技術科)

---

【要 約】「馬込半白」の収量性は、一般品種より低いが、他の半白系品種と同等か、やや高い。4月まき露地栽培より3月まきハウス栽培で収量が多くなる。

---

【目 的】

これまでに、「馬込半白キュウリ」における接ぎ木栽培が、収量や果実品質に及ぼす影響を明らかにし、「江戸東京野菜主要5品目・暫定栽培マニュアル(2017年度版)」を作成するための資料とした。今年度は、複数の半白系キュウリを異なる作型で栽培して「馬込半白」の収量特性を把握し、マニュアル改定のための参考資料とする。

【方 法】

1. 3月まきハウス栽培：2018年3月5日に台木「GTⅡ」、3月8日に「馬込半白、相模半白、半白節成、エクセレント節成353」を播種し、挿し接ぎ後、4月11日にUVカット散乱光フィルムを展張したハウス内に定植した。株間70cm、栽植密度0.79株/m<sup>2</sup>のネット仕立てとし、整枝は半放任とした。定植後は1～2回/日の自動灌水を行った。
2. 4月まき露地栽培：4月9日に「馬込半白」ほか3品種を播種し、5月11日に赤土客土圃場に株間80cm(0.76株/m<sup>2</sup>)で定植した。ネット仕立てで半放任栽培とした。

【成果の概要】

1. 3月まきハウスにおける「馬込半白」は5月下旬から可販果(A品+B品)が多く、6月上旬をピークに収穫果数が漸減した(図1)。「相模半白」は5月下旬に「馬込半白」と同等の収穫果数となったが、曲がり果、両性果、奇形果が目立った。「半白節成」は5月下旬から6月下旬まで収穫果数が漸増し、その後は急激に減少した。「エクセレント」は5月中旬から可販果が得られ、5月下旬～7月下旬の2ヵ月間は曲がり果も目立ったが安定した可販果数となった。「馬込半白」の可販果収量は株あたり13kgで、「エクセレント」の半分程度、「相模半白、半白節成」と同等であった(図2)。栽培期間中、うどんこ病の発生がみられたが、蔓延することなく、べと病は発生しなかった。
2. 4月まき露地の「馬込半白」は、6月中旬～下旬に果数が増え、その後は減少し、べと病のため7月下旬で栽培を終了した(図3)。「相模半白」の果数は7月上旬にピークとなり、曲がり果と尻細果がやや多かった。「半白節成」は「馬込半白」に似た推移を示したが、7月中旬に落ち込んだ。「夏すずみ」は6月下旬～7月下旬で安定した可販果数となったが、曲がり果も多かった。「馬込半白」の株あたり可販果収量は「夏すずみ」より少ないが「相模半白」より多く、「半白節成」と同等であった(図4)。

【残された課題・成果の活用・留意点】

3月まきハウス栽培で、80日間にわたり収穫することができ、4月まき露地栽培の2倍以上の収量となった。今後、ハウス栽培の優位性を確認するとともに播種日の影響を検討する。

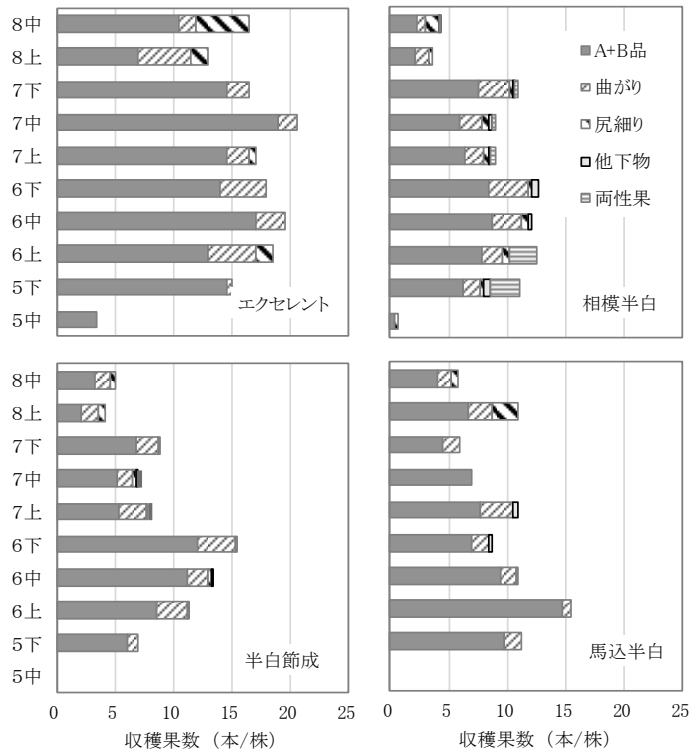


図1 3月まきハウス栽培におけるキュウリ4品種の旬別収穫本数  
 「他下物果」は尻太果、肩こけ果、奇形果など販売できないもの。

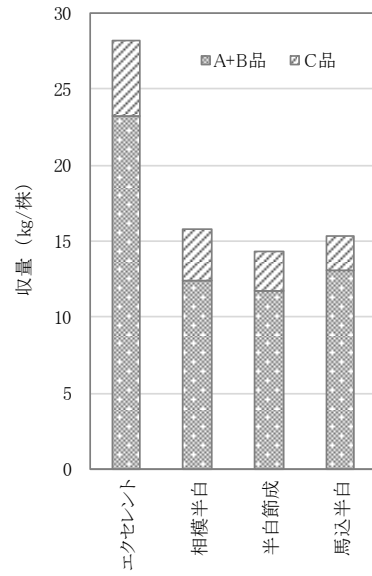


図2 3月まきハウス栽培におけるキュウリ4品種の収穫量  
 A、B品は可販物、C品は曲がり果、尻太果、その他販売不可のもの。

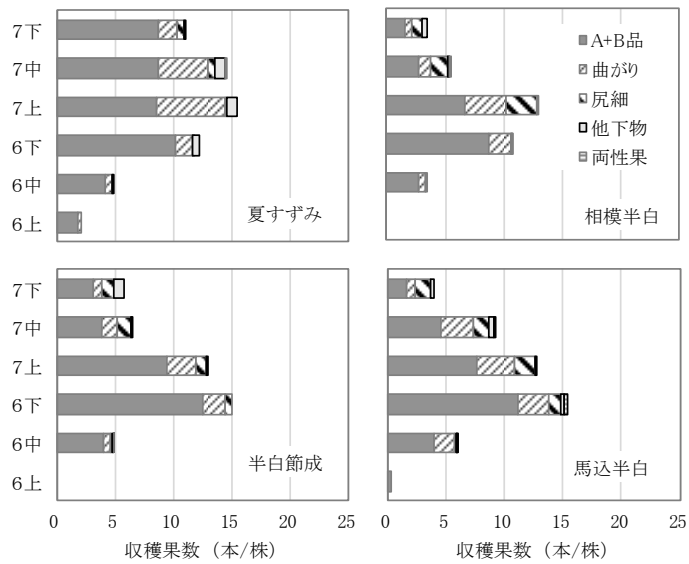


図3 4月まき露地栽培におけるキュウリ4品種の旬別収穫本数  
 「他下物果」は尻太果、肩こけ果、奇形果など。収穫果の平均果実重は140～170g

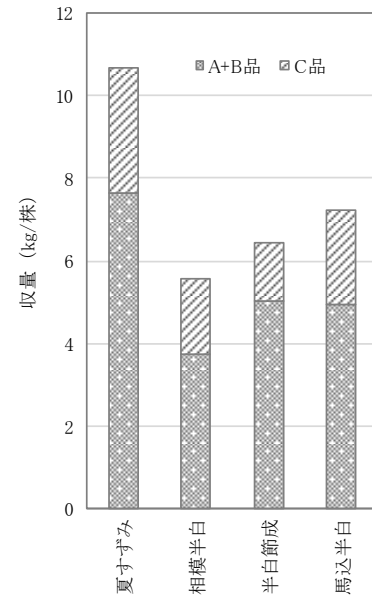


図4 4月まき露地栽培におけるキュウリ4品種の収穫量